

在仏モロッコ移民の国境を越える結婚式と *immigré* イメージ

—ビデオに写された披露宴を通して—

渋谷 努

1) はじめに

モロッコ中部に位置するサメル村¹出身者²を父親に持つラシッドは、モロッコの大学を卒業後、研究を続けるためにフランスに留学した。彼は博士課程に進学したのち、モロッコ出身女性と結婚した。彼らはフランスで書類を提出した後、披露宴をモロッコで行った。フランスに住む移民は結婚の際に、フランスでは書類上の手続きだけを行い、モロッコに戻ってから盛大な式を挙げるが多かった。移民たちは大がかりな式をビデオカメラに収めた。調査当時モロッコでは、披露宴をビデオに録画することが流行っていた。それぞれの披露宴にはプロのカメラマンが一台または複数台のカメラを持って録画に来た。その後、テープ編集をし、新郎新婦に納品した³。新郎新婦は、自分たちの披露宴が録画されたカセットをモロッコ国内の親戚に送るだけでなく、フランスなどヨーロッパ諸国に住む親族や友人たちに送っていた。

フランス社会に適応し、定住化が進んでいると見なせる先述のラシッドも、モロッコに住む家族や親族との関係はとぎれず（渋谷 2005）、結婚式も出身地のモロッコで行った。ラシッドのように居住先への適応が進んでも、出身国との関係を持続する者を、移民研究者は越境民 (*transmigrant*) と呼んだ (Glick-Schiller et al. 1995,48)。

移民が、移住地と出身地との国境を越えた関係を構築し、維持している現象に着目した研究者たちが、「トランスナショナリズム」 (*transnationalism*) という視点を打ち出した (Basch et al. 1994, Kearney 1995, 548)。トランスナショナリズムとは、「地理的、政治的、文化的境界を超えて広がる領域を舞台として移民が展開する社会的なプロセス」 (Brettell 2000,104) を指す。この視

1 以下で用いる村名や人名は、プライバシー保護のため仮名にしている。また人名の表記については、正則アラビア語発音ではなく、インタビュー時の発音に近い形にした。

2 本稿でサメル村出身者と言及する場合は、国内移住者ではなく海外、特にフランスに渡った者を指すこととする

3 カメラ屋に頼むと撮影から編集まで一つのセットになっている。結婚式を行った日付や新郎新婦の名前を、最初に入れ、その後コーラン最初の一節を文字で入れ、それを朗読している場合もある。

点に立つと、「移民は、もはや『根無し草』ではなく、国境を超え、異なる文化と社会システムの間を自由に往来する人々」(Brettell 2000,104)と見なせた。一例を挙げると、移民は、出身地の選挙における投票行為、政治活動や多国籍企業の活動など、政治的・経済的活動に「積極的に参加し、国境を超えた社会的場」(transnational social field)を形成していると論じられた(Bash et al. 1994)。

トランスナショナルな移民研究を振り返ると、移民の政治や経済的なつながりを扱うことが多かったのに対し、宗教現象に関する研究が少ないことが指摘されている(Gardner and Grillo 2002:180)。既存の研究の中ではイスラームのような世界宗教の国境を越えたネットワークに関するものがある(Metcalf 1996)。さらに世帯レベルで、居住先で行っている宗教実践に関する分析はわずかながらみられるが(吉原, クネヒト 2001)、移民が出身地で行う儀礼に関してはほとんど注目されることはなかった。

本稿では、フランスに住むモロッコ出身移民が国境を越えて行っている結婚式、その中でも特に披露宴の内容と特徴を析出し、さらにその特徴が生じた背景を明らかにする。そして披露宴を通して移民と出身地に住む者および居住先との関係を考察し、儀礼が変容する際の3者の影響関係について分析する。

本論で用いるデータは、私がフランスの首都圏である Ile-de-France で1997-98年、及び2003年2-3月、2004年2-3月にかけて、村出身者が構成する47世帯を対象に行った調査、及び1998-99年にモロッコのサメル村21世帯(村に於ける全戸数)及びモロッコ内の都市フェス40世帯で行った文化人類学的調査で得た資料に基づく。

2) 移民と出身地の概況：ビデオカセットを介した国境を越える相互関係

1999年現在、パリ及びその周辺に住むサメル村出身者は本人が渡仏した者、親が村出身で国内都市部で生まれ育った後に渡仏した者、フランスで生まれた者を含めて147名だった。その内訳は、労働者が62名、彼らの家族が67名、そして留学生が18名いた。彼らの多くは、治安が悪く移民の集住地として知られているパリ周辺の「郊外」地域やパリ市の各区内に住んだ。

移民、特に第一世代は、フランスでも同村者や同地域出身者の間で、緊密な相互扶助関係を発達させた。女たちを中心にお互いの家を訪問し、男たちは同地域出身者が集まる喫茶店に頻繁に通い、情報交換を行った。こうして彼らは、フランス社会の中でマグレブ出身者による飛び地を形成した。

1960年代後半から、サメル村ばかりでなく、都市部に住む者が海外に移住した。彼らの多くはモロッコ国内で高校や大学などの高等教育を受けていた。彼らの中には、自分たちのフランス語能力や専門知識を利用し、熟練工やホワイトカラーの職種に就く者もいた。さらに80年代以降は、村からモロッコ都市部へ移住した人の子供たちがフランスへと留学し始めた。留学生の多くは、

当初はフランスで学位を取得したらモロッコに帰ると考えていたが、フランスに住む間に方針を変えて、大半の留学生は大学卒業後フランスで就職した。

フランスへの適応が進んでいると考えられる高学歴者も、フランスで移民の飛び地に住んだ。飛び地の中で他の移民たちとのつながりを保ち、祖国に住む親族とも頻繁に電話で連絡を取った。また、彼らの多くは定期的に祖国に帰り、モロッコに住む親族との交流を続けた。フランスでできた友人をモロッコに連れて行き、親族に合わせることもあった。

フランス社会に文化的にも社会的にも適応している移民たちも、実生活では様々な差別体験を受けていた。パリ市内の清掃会社に勤めているアブデュッラーは彼の外見によって差別を受けた経験があった。警察の尋問を受けたり、スーパーマーケットでお札の点検をされたり、万引きと間違われたりした。

ムハンマドは現在出版会社に勤めているが、この仕事にたどり着くまで何度か仕事を変えた。仕事を辞める際に移民の子供だからという理由で辞めさせられた場合はなかったが、仕事に就こうとしたときにアラブ人だからという理由で断られたと、彼が思うことが何度かあった。このような差別経験が、彼らのフランス社会に向けての態度に大きな影響を与えた。

移民と出身地に住む者との情報交換では、かつては手紙が多かった。しかし現在は電話によって、移民と出身地に住む人々の間で常時情報交換ができた（渋谷 2012）。情報の伝達と同様に、情報と出身地の人々との間では披露宴を録画したカセットが国境を越えてやりとりされていた。たとえば、サメル村出身者で Ile de France に住み、ビデオデッキを持っている5家族が、98-99年の一年間に受け取ったり送ったりした結婚式のビデオカセットのやりとりの本数は35本だった。

彼らがビデオカセットのやりとりを行っている相手は、地理的に近いパリおよびその近郊に住む同村出身者に対して9件(25%)、パリおよびその近郊に住むフランスで知り合ったモロッコ人に対しては6件(17%)だった。彼らに対しては、移民たちがフランスに帰国した後、すぐに結婚式のカセットを渡した。フランスの他の都市に住む同村出身とは8件、同じくフランスの他の都市に住む他地域出身のモロッコ人に対しては3件やりとりが見られた。さらに、フランス人の友人に見せる場合もあった。モロッコ都市部に住む者に対しては9件あった。結婚式に参加した者に対しては、式後郵送されるか手渡された。それ以外の場合には、自分たちが彼らの所に遊びに行ったときに持っていか、向こうが遊びに来たときに持たせた。受け取った者は、カセットに録画された結婚式を別の村出身者に見せていた。

ここで注意しなければならないのは、出身村には結婚式のカセットが送られていない点である。それは、村には調査当時、電気が通っておらずカセットを送っても見ることができないためだった。だが、彼らが結婚式のビデオを見ないのではなく、都市部に住む親族の家で見えていた。そこで、彼らがビデオを見せたいと考える相手は日常的に会える近隣に住む同じ村の出身ばかりでなく、フランスの他の都市に住む同じ村出身者やモロッコに残っている同じ村出身者である。こ

うやって結婚式のビデオは国境を越えて人々の間に広がっていた。移民とモロッコに住む者は、情報や送金によって国境を越えて結びついており、国境を越えた相互関係を形成していた。

結婚が成立するための手続き

移民の結婚の成立を考えるには、モロッコ及びフランスそれぞれで必要となる法的・宗教的そして社会的条件を取り上げなければならない。移民たちは、フランスでは結婚するために市役所や区役所にまたは領事館に婚姻届を提出しなければならない (Rude-Antoine 1990:68-72)。移民たちの間では、フランスでの法手続きを重要視する者は少なく、フランスで結婚生活をするために必要な、事務手続きとしか見なさない者が多かった。その代わりに、多くの移民たちはモロッコで行う披露宴を重視していた。

しかし、フランスでの世俗的な手続きに単なる法的段階以上の意味を付与している場合があった。それは、結婚を機にフランスに配偶者を呼び寄せた場合の新郎新婦だった。結婚を機にフランスに渡った新郎の一人は、モロッコで行った披露宴以上に、フランスでの婚姻手続きの方が、これからフランスで暮らせるという不安と安堵感が込み上げてきたと語った。

モロッコでは結婚するのに二つの手続きを踏む。結婚するのに必要な宗教的・法的な手続きとして、結婚契約書 (Akd el Zauaj) を書く。そしてその後ヘンナ儀礼や披露宴が行われた。ヘンナ儀礼では、新郎新婦それぞれの家で、植物の葉の粉であるヘンナ染料を用いて結婚当事者に対して模様を描いた。披露宴の際には新婦は式用の重く贅沢な衣装を着た。そして式場に多くの人が集まって歌い踊った。これまでの研究では、披露宴と特にヘンナ儀礼は地位の変化を象徴的示す通過儀礼として描かれてきた (Combs-Schilling 1989, Maher 1974)。

1974年に新規外国人労働者の受け入れを停止し、フランスに合法的に渡ることが非常に難しくなったために、これからフランスで暮らすことになる移民にとって、フランスでの合法的に滞在するために必要な手続きという意識もあった。しかし移民の多くは、フランスで行う手続きよりも、モロッコで行う披露宴の方を社会的・宗教的に重要視していた。

国境を越えた披露宴の準備

フランスに住む移民は、盛大な披露宴を行うためや新郎新婦の願いを叶えるために、自分が挙げる披露宴だけではなく、近い親族がモロッコで披露宴を行う時には、多額の資金援助をし、結婚する当事者が希望し、年長者が承認した贈り物をモロッコに持ち込んだ。

パリ郊外に妻子と供に住むムハンマドは、1999年当時でフランスに渡って11年が経ち、工場で働いていた。98年8月に彼の弟がフェスで披露宴を行った。ムハンマドは、披露宴を準備するために多額の送金をした。その金は、結婚式場を借りるためなどに用いられた。ムハンマド一家は結婚式に出席するために、7月後半にモロッコに帰国したが、その際にも、新生活を始める二人の

ために電化製品を持っていき、現金も贈った。私が2003年に行った調査によると、同年にモロッコで行われた結婚のために、パリ及びパリ郊外に住む移民が送金を行ったのは7例あった。

モロッコでは、かつて披露宴は新郎新婦の家で行われていた。しかしフランスに住む移民がモロッコで披露宴を挙げる場合、都市部に親の家があったとしても、披露宴用の特別豪華な部屋を借りて行くことが多かった。それは彼らがより豪華な場所でより多くの人に出席してもらって披露宴を挙げることを望んだからだった。移民たちがモロッコ都市部で披露宴を行った費用は、私が調査を行った中では1万DH～4万DH、日本円にして10万から40万円にのぼった。

移民がモロッコの披露宴を行う際に提供するの資金だけではなく、移民たちは披露宴の準備のために、様々なものをフランスから持ち込んだ。彼らがモロッコの披露宴に持ち込んだものを家電、食品、衣装の大きく3つに分けることができる。

移民たちはフランスで買ったデジタルカメラやビデオレコーダーを持ってきて、披露宴のシーンを映像におさめていた。さらには、持ってきた家電製品を新郎新婦にプレゼントすることもあった。また披露宴の際に流す音楽のためにCDプレーヤーやアルジェリア起源の音楽ライさらに映画音楽などのCDを持ってきて、披露宴のバックミュージックとして流した。

移民たちがモロッコの結婚式に持ち込むのには、食品もあった。特に参列者に振る舞われるお菓子を用意して持って行った。ナディアはフランスで、アーモンドに砂糖をまぶしたお菓子ドラジェを、フランスで自分で作ったり買って持ってきた。それ以外にも、モロッコに住む者に人気があるチョコレートを持ってきて参列者に振る舞った。

そして移民たちはフランスで買った白いウエディングドレスを持ち込み、モロッコの花嫁衣装にも変化をもたらしていた。自分の弟の結婚式の際に、パリ近郊に住むナディアは、弟の嫁のためにウエディングドレスを購入した。彼女はパリ郊外の古着屋や衣服の安売り店を回って、安くいいものを探していた。結局ナディアは少し大きめの中古品を買って、新婦の寸法にあわせて直した。移民、特に女性移民の中にはナディアのように新婦のためにウエディングドレスを探して買って持ち込む者がいた。さらに式場を飾るようなパーティ用品を買って、会場を飾ることもあった。

以上のように移民たちは、モロッコでひらかれる披露宴に参列するだけではなく、資金の面からも物質の面からも協力していた。それはサリウが「国境を越えた儀礼空間の分割」(transnational division of ritual space)と呼んだように(Salih 2003)、移民たちは資金提供しさらに居住先の風習や物質を持ち込み、影響を与えた。つまり、結婚披露宴がモロッコで行われたとしても、移民によってその準備はモロッコとフランスという国境を越えて二カ所で行われた。

ビデオに映される披露宴

次に1998年に行われた披露宴について紹介する。結婚したのは現在パリ郊外に住む移民だが、

披露宴はモロッコの都市フェスで行った。紹介するビデオは、新郎の弟が撮影したものだ。モロッコ都市部で行われる披露宴は、一晩中行われることが多く、このビデオもその中の2時間分が録画された。

私が訪れた1999年の9月のある土曜日に、ムスタファの家には彼の妻子と彼の姉夫婦、近所に住むハミッド一家が訪れた。そして、ムスタファたちはモロッコに帰ったときに受け取ったビデオを、テレビを囲んでおいてあるソファに思い思い寝転がりながら、ビデオを見始めた。そのビデオは、前年の夏にフェスで行われたムスタファの父方イトコの披露宴を録画したものだ。

ビデオが始まると、そこには壮麗な結婚場が映しだされた。それを見て結婚式に出席しなかったハミッドが、「これはお金がかかった結婚式だ」と感嘆の声を挙げた。すると、ムスタファは建物のレンタル代や衣装代、出席者に振る舞われる食事代など結婚式の費用を教えた。この部屋を借りるのに一晩で3万DH、日本円で約30万円がかかった。ビデオに映し出されたのも、大理石にイスラーム文様で彫刻されている式場の建物だった。

ビデオが進むと、雇われたバンドが映され、演奏が始まった。すると参列者は式場のホールで踊り始めた。参列者は、踊りに熱中していくと、演奏しているバンドの人々に金を与えた。もっと激しく、もっとがんばって演奏してもらうために、参列者は楽団員の服に紙幣を差し込んでいた。

披露宴には、生バンドが雇われることが多かった。楽団は民俗的な音楽やモロッコのポピュラー音楽であるシャーギーを演奏することが多かった。参列者たち、特に若者たちは、既婚、未婚、性別を問わず、踊り明かした。生バンドを雇わない場合には、カセットテープで音楽を流していた。さらに、生バンドを雇っていた場合でもエレキギターやシンセサイザーを用いるライを流す際にはカセットやCDを用いることもあった。はじめは男同士、女性同士と同性同士で踊ったが、次第に両性が入り交じって踊り始めた。

ビデオの中で彼らに興じる踊りの中には、モワイアンアトラスの伝統的な踊りハイデュースがあった。しかし、その時に流れる音楽はモロッコにおける大衆音楽であり、ベルベル語ではなくアラビア語の歌詞だった。

新郎新婦またはその親がイスラーム主義の影響が強い場合には、同じ建物の中でも男女がそれぞれ別の部屋で披露宴を行うことが報告されているが (Ossman 1994:176-178)、本稿で取り上げているビデオの披露宴や私が参加した披露宴は男女が一緒に集まり踊っていた。

新郎の父親やその他の大人の男は、スーツやジュラバなどを着用して出席するのに対し、女性たち特に移民の女性たちは、モロッコだけではなくフランスの移民社会でも流行っている服を着て、高価な金製のベルトを巻いた。このベルトは、経済的に余裕がない場合には、金製ではなく偽物のこともあった。しかし、このベルトが本当に金製で大きければ大きいほど、それを絞めている女性の地位は高いものと見なされた。

新郎新婦が入場した。新婦が乗って来たのはクッパだった。クッパを使うのは、かつては新郎がフェスのアラブ旧家または、シオルファと呼ばれる預言者からの血縁関係を持っている場合のみだった。現在では、新郎がアラブではなくベルベル出身者であっても、都市部で行われている多くの披露宴では、クッパが入場の際に用いられた⁴。

花嫁は何度も衣装を変えた。彼女の衣装はナガファによって用意された。ナガファとは花嫁が身につける宝石や衣装を提供するために雇われた女性である。かつてはナガファを雇い、披露宴の備品を借りるのは都市の富裕層のみで、村の結婚式では見られなかった。さらに、花嫁が結婚式の最中に身につけたものは、かつてはすべて新婦のものだった。調査当時では衣装や装飾品は借りてくることが多くなっていた。

テレビの画像の中では、何回化のお色直しの後、新郎が白いジュラバ、新婦の方はテユリーラと呼ばれる、緑地で頭を覆うものを付け、色鮮やかな衣装のカフタンを着て現れた。これが、モロッコにおいて新郎新婦が着る正装と見なされていた。新婦はミーダと呼ばれるカゴに乗り担がれて現れた。新郎も、別のミーダに乗って画面の中にあられた。

新郎はカゴに担がれて式場にはいると、参列者が作った輪の中に入り、そこを何度かまわった。その後、カゴの上で立ち上がった。

参列者が新郎新婦に花びら状のもの⁵を投げかけた。それに対し、立ち上がっている新郎は何かを振りかけるような仕草を行った。その日だけスルタン（王）になっている新郎は参列者にバラカ（アッラーの恩恵）を投げ与えたのだ。参列者が新郎にハンカチを手渡すと、それを受け取った新郎は自分の汗を拭い返した。新婦は微笑み手を振って参列者に答えた。新郎によるとこの披露宴にかかった費用は総額で日本円にして50万円近いものだった。

モロッコで行われている結婚式の過程から見ていくと、ビデオに収められている部分は、図1の中で、点線で括られている、④から⑥の間である。その部分はクッパに乗って新婦が登場し、アラビア音楽がかけられている点などからアラブ化が進んでおり、よりきらびやかな側面だった。

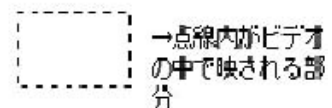
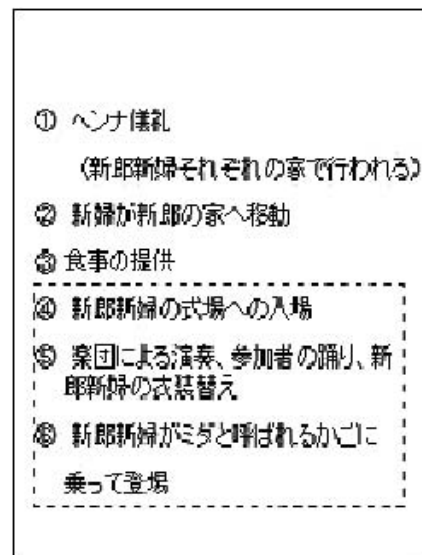


図1 移民の披露宴と録画される部分

4 これはアラブ化の現れともいえる。少なくとも昔の村の結婚式では見られなかった。

5 実際に花びらであることもあれば、その形に似せた紙吹雪の場合もある。

伝統的にモロッコで行われた結婚式で重要だったのはヘンナ儀礼だった。フランスに移住した者がモロッコ都市部で結婚式をする時でも、結婚式当日に新郎の父親の家でヘンナ儀礼は行われている。しかし、その場面がビデオや写真に取められることはなかった。その理由を尋ねるとその場面が神聖なものだからという返答が多かった。この様な宗教上の理由に続けて、フランスに住む私のインフォーマントは、次の様に言った。「そのようなものを映しても何もならないし、誰も特別には見たいとは思わない。」移民たちがカセットを通したいのは儀礼を経て結婚が成立したという点ではなく、豪華な金のかかった披露宴を挙げたという点である。

以前からモロッコでは結婚式を盛大に行うことは、名誉なことと見られてきた。それは式を挙げる二人だけではなく、二人を含む両方の家にとって名誉なことだった。移民が都市部で行う結婚式も同じだった。そこでビデオに映し出されるのも、木彫でイスラーム文様が彫刻されている豪華な式場の建物であり、何度も着替えて登場する新婦の高価な衣装なのである。大人数の楽団であり、出席している女性たちのきらびやかな衣装のカフタンであり男性のタキシードやスーツ姿である。フランスに住む移住者たちは豪華な披露宴を挙げ、それをカセットに取め、モロッコやフランスに住む友人や親族に見せた。これは彼らにフランスでの成功を示すことになる。

ビデオを見ながらの会話：変化への願望

移民の女性たちは、披露宴のビデオを見るのが好きで、映像を見ながら自分の結婚式はどうだったとか、未婚の女性は自分の結婚の時にはどうしたいのかを語り合っていた。そして特に親子や年長者との会話の中で、未婚の女性たちは自分の理想とする結婚式のあり方について語り、自分の希望を提案していた。

フランスで生まれ育った第二世代や幼い頃にフランスに連れてこられた未婚の一世の多くは、フランス人の友人の結婚式に参加していた。さらにほとんどの者はテレビや映画などからフランス風またはヨーロッパ風の結婚式を見て知っていた。彼/女らは、異文化の要素を積極的に評価し、それを自分たちの将来の結婚式に取り込みたいと考えた。彼/女らは自分たちの考えを、ビデオを見た機会などに、友人や同年代の親族に対してだけではなく、親や叔父叔母といった上の世代に話すことがあった。

移民たちは文化をハイブリッド化する際に、フランス社会や出身地に住む者、特に年長者からのまなざしに注意する必要がある、彼らとの交渉を通して、彼らが受け入れられる範囲内で行動した。移民たち、特に第二世代による価値の変容は、両親を中心に近隣の人々やモロッコに住む者が受け入れる範囲内での変化でなければならなかった(渋谷 2003)。つまり若者たちは自分の好みを押し通すのではなく、周囲の人々、特に年長者の承認を得なければならなかった。自分の考えを年長者に提示し、彼らの反応を通して、可能かどうかを判断する必要があった。

女性たちの間で自分の結婚式に取り入れたいと願っていたのは欧風の白いウエディングドレス

を着ることだった。この提案は、調査当時ではすでに受け入れられていた。ただ、白いウエディングドレスだけで披露宴を終えることは許されていないが、衣装替えの一つに含めることは承認されていた。

次に披露宴に流される音楽に関して、願望を持つ者もいた。フランスの移民の間で人気のあったライを流したいという意見は、受け入れられていた。ただ、モロッコのバンドでは機材がそろっていないことが多いのでカセットやCDなどを持ち込んだ。

しかしクラシック音楽や、アメリカやフランスの映画やドラマで披露宴の場面で流される曲をかけたいという希望もあった。このような欧米起源の音楽をフランスに移民たちの多くは受け入れていた。しかし、式の最中にこのようなスローテンポの曲を流すのは、踊れなくなってしまうという理由で選択されなかった。多くの場合は式が始まるまでの時間や新婦が着替えに行っていて、式の雰囲気が幾分落ち着いたときに流されていた。

インフォーマントの一人は、最初は村で伝統に則った形で質素な結婚式をしたいと思っていた。そこで村で結婚式を挙げたいと親に相談した。すると彼の親からも新婦側の親からも猛烈に反対された。それ以外にもイスラームに厳密に則ってバンドを雇わず、参加者にも踊りを自粛してもらうことを望む移民二世代の女性がいた。また、モロッコの結婚式が過度に豪華なものになりすぎていることに対して反発を感じ、何度も着替えることをやめたいとか、いくつもの宝石を身につける必要はなく、もっと簡素に式を挙げたいと考える二世代が多くいた。さらに、フランスでの友人たちと同様に法的手続きだけで終わらせてしまい、モロッコで式を挙げることを望まない者もいた。

彼らが、モロッコで披露宴を開かない、または簡素化するのには、経済的理由が大きかった。これから結婚しようとする者は、就職している者にしろ不安定労働にしか従事していない者にしろ、自分たちの将来に対して漠然とした不安を感じていた。そこで、披露宴にも必要以上に派手にして支出を増やすのにためらいを感じ、披露宴代を少額に抑えて、今後の生活のために貯めておきたいと考えていた。

移民の若者たちの間での、自分たちの結婚式を簡素化し、経済的なものにしたいという彼らの願いは、親や親族といった年長者たちに受け入れられることはほとんどなかった。お金をかけていない披露宴は移民 immigré の結婚にはふさわしくないからだった。

モロッコに住む者は、フランスに住む移民たちを経済的に恵まれた「第一世界」フランスに住み、経済的に自分たちよりも優位にいると見なした。モロッコに住む者は、移民と自分たちとの関係をモロッコとフランスという国家間の経済関係を反映させ、移民を immigré とカテゴリー化し、自分たちと区別して捉えた(渋谷 2007)。

パリ郊外のコロンプに住むムハンマドは、高額な披露宴をひらいた理由を以下のように説明した。

自分がフランスにいるのに、恥ずかしい披露宴をするわけにはゆかない。盛大にやらなければ *immigré* のいない披露宴といわれてしまう。

ムハンマドが語ったように、移民は自分たち及び親族の結婚の際に高額の資金を提供することを自分たちの義務と考えていた。移民たちは自分たちの援助によって披露宴の会場や花嫁の衣装が豪華になり、来客にふんだんに食事が提供され、その豪華な披露宴を録画したビデオカセットが流布されることを望んだ。それは移民にとって自分の経済的優位さをモロッコに住む者や他の移民に対して示すとともに、自分が *immigré* としての経済的義務を果たしていることを彼らに示すためでもあった。

結論

フランスに住む移民たちは1990年代から披露宴をビデオに録画し、そのカセットをモロッコに住む親族だけではなく、フランスを含むヨーロッパ諸国に住む移民にも送り披露宴を見せていた。ビデオに映し出されるのも、木彫でイスラーム文様が彫刻されている豪華な式場であり、何度も着替えて登場する新婦の高価な衣装だった。披露宴の内容に関する情報は、カセットのやりとりとともに電話を通じてモロッコ、フランスに住むサメル村出身者のもとに伝わった。

移民たちは差別経験によってフランス社会への十全な帰属意識を持つことができなかった。そこで、彼らはたとえ移民以外の友人を持ち、文化的・経済的にもフランス社会に適応していたとしても、盛大な披露宴をモロッコで開き、移民とモロッコに住む者の間で形成されている国境を越えた相互関係の中で名声を獲得しようとした。移民はそのことで故郷との関係を再確認し、故郷を自己の拠り所とすることができた。故郷をアパデュライは「部分的に創られたものであり、脱領土化された集団の想像力の中のみ存在している」と論じた (Appadurai 1996:49)。移民にとって盛大な披露宴を行い、さらにビデオに映し出された結婚式の映像を見ることは、出身村から離れて住む移民が、自分たちの起源を求めて想像する機会となり、故郷とのつながりを再確認する機会となっていた。

ロンドンのアジア系移民の儀礼を考察したバウマンは、移民たちの儀礼には異質な他者性を受け入れるかどうかの交渉の過程を見いだすことができると指摘している。既存の研究では儀礼を、集団にとって内向きの行為として、特にその集団を祝福する行為と解釈してきた。しかしバウマンは多くの儀礼はその中に競合する要素を含んでおり、社会的価値の永続化を祝福するためだけではなく、文化変化への願望を示す機会でもあると論じた (Baumann 1992:98-99)。つまり、儀礼を通して参加者と「他者」との様々な関係を見なおし、その過程は文化的な価値や自己知識を再定義する機会ともなっている。

モロッコの移民の披露宴にも、フランス社会からの影響を受けている第二世代の文化変化への願望を披露宴に持ち込むことを認めるかどうかに関して、第一世代およびモロッコに住む年長者

による承認が必要だった。披露宴のビデオカセットを見ているときの会話を通して、自分たちの願望をほのめかせ、それに対する年長者の反応で実現が可能かどうか判断した。認められた内容を実現するために移民たちはフランスから資金援助を行い、家電や食品、小食品をモロッコに持ち込み、国境を越えて披露宴の準備をすることで自分たちの願望を実現していた。

若者たちの変化の願望が叶えられないこともあった。その多くは披露宴を行わない、または経済的に小規模のものに押さえることだった。それは出身地に住む者との関係で immigré というイメージにふさわしくないからだった。

移民たちは、故郷に住む者が自分たちに対して抱いているイメージに合わせるために豪華な披露宴、「ふさわしい」結婚をしなければならなかった。高額な盛大な結婚式を開催することで、移民たちは、immigré というイメージが彼らに貸す経済的義務を果たしていることを、モロッコに住む者や他の移民に提示する必要がある。移民にとって盛大な披露宴は、経済的な負担となるが、故郷と移民としての自分との差異を再確認する機会だった。つまり送金は移民が自分を immigré とカテゴリー化し、今後もフランス社会で暮らしていくことを自分に対して再認識させる機会だった。

披露宴を行う、またはそのビデオを見ることを通して、移民たちは出身地に住む者との連帯感を再確認するとともに、モロッコに住む者との間にある差異を見だし、自分が immigré であることを再確認する機会ともなっていた。

引用文献

Appadurai A

1996 *Modernity at Large*, Minneapolis, University of Minnesota Press

Baumann G

1992 Ritual implicates 'Others', in Daniel de Coppet (eds) *Understanding Rituals*, 97-116, New York and London: Routledge.

Basch GL., Siller. NG., SzantonCB.

1994 *Nations Unbound*, Langhorne, Gordon&Breach.

Brettell, C. B.

2000 Theorizing Migration in Anthropology: The Social Construction of Networks, Identities, Communities, and Globalscapes," in C. B. Brettell and J. F. Hollifield (eds.) *Migration Theory: Talking across Disciplines*, 97-135 New York and London: Routledge.

Combs-Schilling, E M

1989 *Sacred Performances*, New York, Columbia University Press.

Gardner K., Grillo R

2001 Transnational households and ritual, *Global networks*, 2-3, 179-190.

Schiller, NG., Basch GL., Szanton CB

1993 From Immigrant to Transmigrant: Theorizing Transnational Migration, *Anthropological Quarterly*, 68, 48-63.

Maher, V

1974 *Women and property in Morocco*, New York, Cambridge press.

Metcalf B D (eds)

1996 *Making Muslim Space in North America and Europe*, Berkley and Los Angeles, University of California Press.

Ossman S

1994 *Picturing Casablanca*, Berkley and Los Angeles, University of California Press.

Rude A E

1990 *Le mariage maghrébin en France*, Paris, KARTHALA.

Salih R

2003 *Gender in Transnationalism*, London and New York, Routledge.

Westermarck E A

1914 *Marriage Ceremonies in Morocco*, London, Mcmillan.

渋谷 努

2003 「国境を越えた名誉競争 - 在仏モロッコ移民と母村に残る人々とのつながり -」
『日本中東学会年報』18-1, p109-136。

2005 『国境を越える名誉と家族 - 在仏モロッコ移民をめぐる多現場民族誌 -』宮城, 東北大学出版会。

2007 「定住化と送金：フランス在住モロッコ出身者と母国との国境を越えた相互関係の多様化」『移民研究年報』13, p123-134。

2012 「うわさのコントロールによる在仏モロッコ移民と出身地との国境を越えた社会関係の変容と持続」(高谷紀夫・沼崎一郎編)『つながりの文化人類学』宮城, 東北大学出版会, p241-265。

吉原一男, クネヒト・ベトロ編

2002 『アジア移民のエスニシティと宗教』東京, 風教社。